

瘋癲行者覚書

中 村 喜 和

は じ め に

ロシアのキリスト教信仰の歴史のなかには、正常の理性を失った者を神に近い者として尊崇する伝統があった。この伝統の起源は、4世紀にはじめてエジプトにあらわれた“saloi”と称される一群の修道士に求められる。東方教会の“saloi”のうち、6世紀の小アジアのシメオンや9世紀のコンスタンチノーブルのアンドレアスは、その伝記がスラヴ語に訳されて、早くからロシアに知られた。もっとも、〈聖なる愚者〉を崇拝する風習はカトリック圏はもとよりプロテスタントの社会にも見出されるし、おなじような精神傾向は、キリスト教世界以外の諸民族のもとにもみとめられるようである。日本では〈妙好人〉と呼ばれる人々を、あるいは〈聖なる愚者〉の範疇に含めることができるかもしれない。しかし、およそロシアにおける“jurodivyj”（ここでは瘋癲行者という訳語をあてたい⁽¹⁾）ほど、その数において、またその社会的役割において、いちじるしい発展をとげた例は少ないように思われる。

瘋癲行者はもはやソビエトにおいては、アクチュアルな現象ではなくなったらしい。その卑近な例証として、もっとも新しいソビエト大百科辞典（第二版）ではこの言葉にわずか6行のスペースしか与えていないことをあげることができる。念のためにそれを引用すれば、“jurodivyj”とは〈① 信者の考えによれば予言の能力をもつ狂人（あるいは狂人とみせかける）禁欲者。② 無意味でばかげた振舞をする、精神薄弱な、狂気の（あるいは狂気をよそおう）者〉である。この定義を、革命前の〈ブロックガウス=エフロン〉の百科辞典に収められたおなじ項目と並べてみれば、両者は驚くほどのきわ立った対照をなしていることがわかる。今世紀の初頭に出たこの百科辞典は“jurodivyj”に対してまるまる1ページ、142行をあて、次のような定義をもって長

い説明をはじめているのである。〈神ならびに同胞への愛のゆえに、キリスト教的篤信の功業のひとつである《キリストのための瘋癲の行》をわが身に課した者。〉このことは、1917年の直前まで、瘋癲行者たちにロシアの社会が今とは比較にならぬほどふかい関心をよせていたことを意味する。

事の性質上、瘋癲行者に関する信頼できる史料はきわめてとぼしい。瘋癲の行は、本来、非合理的であるばかりか、独特の宗教的信念にもとづく反理性的な実践であった。〈正常な〉社会の側も、この行を鼓舞したり奨励したりすることはなかったのである。このような困難もあって、筆者の考察はいまだ充分まとまった結論を提示するにはいたっていない。叙述の重点は、今はほとんど忘れられたロシアのもっとも先鋭的なキリスト者——フランスのスラヴィスト、P. バスカルの言葉をかりれば“chrétien héroïque”⁽²⁾——の生き方なるべく具体的に紹介することにある。とはいっても、紹介といえども偏愛によってくもらされる恐れがあるし、時折まじる解釈は独断によって歪められる危険がある。拙稿を〈覚書〉と称するのは、あらかじめそれらのリスクを弁解しておこうとする意図からにはかならない。

注(1) 従来わが国ではこの語に対して〈宗教狂人〉、〈神の使い〉、〈神がかり的狂人〉、〈痴愚の行者〉等々の訳が与えられてきた。日本ハリストス正教会では〈佯狂者〉という訳語を定めている。このうちどれひとつとして、まだ日本のロシア文学・ロシア史研究者のあいだで市民権を獲得したものはない、と考えられる。したがって筆者がここであらたに瘋癲行者という言葉を用いたとしても、奇をてらわんがために無用の混乱をひきおこすという非難を免れうるであろう。ちなみに、ヨーロッパ諸語では、“jurodivyj”に対する訳語は安定している：英語 holy fool, フランス語 fol en Christ, ドイツ語 heilige Narr など。

注(2) P. Pascal, *Avvakum et les débuts du Raskol*, Paris, 1963, p. 319. バスカルはここで、〈キリストのための瘋癲の行〉はロシアの民衆の信仰の根源的な姿であると指摘している。

1. 瘋癲の起源

ロシアで最初の瘋癲行者として知られるのは、キーエフのベチェルスキ修道院のイサーキイである。この人物についての物語は、現存するロシア最古の年代記である《過ぎし歳月の物語》（あるいは《原初年代記》ともいう）の1074年の項に収められている。それによると、イサーキイは初めトロベツという町の富裕な商人であった。僧院長大アントーニイに許されてベチェルスキ修道院にはいり、せまい庵室にこもっ

て、きびしい修行生活を送りはじめた。食物といえば聖餅一枚、それも一日おきに食べた。けっして横にはならず、坐ったまま少し眠るだけであった。こうして七年たったある日、悪魔たちがキリストと天使をよそおってイサーキイをおとずれ、笛を吹き太鼓を打ち鳴らして彼を踊らせ、さんざんもてあそんだ。イサーキイは疲れ果てて半死半生となり、その後二年間パンも水も口にせず、啞つんぼの状態で横たわっていた。寝がえりもできなかったのも、腰の下にうじがわいた。三年目になって、イサーキイはやっとパンを食べはじめ、教会にも出かけるようになって、こう言った。〈悪魔め、わしはもう洞窟の庵室などにこもらず、修道院のなかを自由に歩きまわって、きさまを打ち負かしてやるぞ。〉イサーキイは身に緊衣をまとい、その上に粗布の上衣を着て、瘋顛の振舞を示しはじめた。朝の勤行にはだれよりも早く出席するのを常とした。かかとを踏みぬいた靴をはいていたので、寒い冬の日には、足が敷石にかく凍りついてしまうこともあった。あるとき料理系の僧がイサーキイに、〈あそこに黒い鳥がとまっている。あれをつかまえてこい〉と言った。イサーキイは相手にむかってふかぶかと頭をさげてから、すたすた歩いていき、難なく鳥をつかまえた。それ以来、この話を伝え聞いた僧団の全員がイサーキイを尊敬するようになった。しかしイサーキイは人間の栄光を望まず、瘋顛の所行をみせて、僧院長や修道僧仲間や俗人たちを不快な目にあわせるようになった。彼を打つ者もいた。それでも彼は瘋顛行者の姿でまよい歩いた。子供たちを集めて、彼らに袈裟を着せたこともあった。そのためにイサーキイは僧院長や子供の親たちから打擲された。彼は昼も夜もはだかで歩き、あらゆる苦しみに堪えていた。ある夜、洞窟のなかの小屋で暖炉が燃え出し、炎を吹き上げた。するとイサーキイは自分の両足を、炎の吹き出る隙間にのせ、火が消えるまで隙間をふさいでいた。

このイサーキイはいくつかの点で、14 世紀以後にあらわれる瘋顛行者と共通する特徴をそなえている。すなわち、成人ののちに〈異常〉心理があらわれ、それが死ぬまでつづくこと、〈異常〉になってからは寒さや暑さに対していちじるしく鈍感となり、はだかのまま歩きまわること、鳥を素手でとらえるような超自然的能力によって人々の尊敬をかちえながらも、奇矯な振舞によって他人から侮蔑されること、などである。ここで“urodstvovati”（瘋顛の所行を演ずる），“tvoriti sja urodom”（瘋顛の姿をする）という言葉が格別の説明もなしにあらわれることは、当時すでにこれらの話が“urod”の本来的な意味である〈不具者〉と明確に区別される独自の内容を獲得していたことを示している。

イサーキイは突然変異のように 11 世紀のキーエフに出現したのではなかった。彼

の精神上の兄弟たちの逸話は、13 世紀に成立した《キーエフ・ペチェルスキ修道院聖僧伝》に数多く集められている。この修道院の事実上の創始者ともいえるフェオドーシイは、改宗したばかりのロシア人にむかってキリスト教徒としてあゆむべき道を最初に示した人物であった。彼がキリスト教徒の最高の目標としてかかげたことは、人の姿であらわれたキリストがその身に受けた苦しみを、自ら追体験することであった。彼自身、〈父母をすてざる者はわれにふさわしからず〉という聖句を実践するために、家出してキーエフにのぼり、大アントーニイのもとで出家した。〈主イエス・キリストは富める者におわしたれど、汝らのために貧しき者となりたまえり。〉したがってキリストに近づくためには、わが身も〈貧しき者〉とならねばならぬ、とフェオドーシイは説いた。フェオドーシイによれば、〈貧しき者〉になるとは、愛と謙譲と服従の美德を身につけることである。イサーキイの腰の下でうじがわいたとき、彼の体をきよめ、着物をかえてやったのは、僧院長のフェオドーシイ自身であった。フェオドーシイの感化を受けてペチェルスキで修道生活を送った僧のなかから、たとえば、公の身分をなげうって院内で料理番や門番をつとめたスヴァトーシャ、死んでいく修道僧のために墓を掘って一生を過ごしたマルコ、パンを焼きながら毎日詩篇を初めから終りまで復誦したスピリドンのような聖僧が輩出した。⁽¹⁾〈人間の栄光〉を望まず瘋癲行者となったイサーキイは、ある意味ではフェオドーシイのもっとも忠実な弟子であった。

ボリースとグレーブがロシアではじめて聖者の列に加えられたことも、このような精神的風土をぬきにしては考えられない。この二人は、10 世紀の末にキリスト教をロシアの国教と定めたウラジーミル大公の子として生まれ、父の死の直後、異母兄の送った刺客の剣にたおれて、短い生涯を終えた。ボリースとグレーブには教会に対する貢献は何ひとつなかった。それにもかかわらず、彼らが同胞のだれよりも早く、11 世紀の 70 年代からキリスト教の聖者としてあがめられることになったのは、この二人が無慈悲な兄に対して、いささかも刃向かうことなく従容として死についたこと、つまり彼らの無抵抗と自己犠牲のなかに、当時のロシア人が真のキリスト教精神の発露をみとめたからにはほかならない。ボリースとグレーブの聖列加入は、しばしば、諸公間の長上権の絶対化をねらう政治的意図のあらわれであると説明される。しかし、二人の聖別がロシアのキリスト教徒の共感をよぶ素地があったからこそ、権力者の意図もこのような形をとって表現されたものにちがいない。

フェオドーシイの唱えた謙譲をロシア的な“kenoticism”と規定したのは、最近な⁽²⁾くなった宗教史家の G. フェドートフである。ロシアのキリスト教徒は、キリストの

なかに、罪をこらしめる厳格な神よりも、まず人間として苦しみをなめた者の姿を見出そうとした。したがって神を信ずるとは、キリストを愛することではなかならぬ。そのためには、自らキリストとおなじ苦しみをなめ、世のあざけりを甘受しなければならぬ。これをつきつめれば、社会一般の常識のなかで、自らを愚者とみとめることになる。真のキリスト者がこのような認識に到達することは、パウロがコリント人に与えた手紙によっても明らかである。〈汝らのうちこの世にて自ら賢しと思う者は、賢くならんために愚かなる者となれ。そはこの世の知恵は神の前に愚かなればなり〉(コリント前書、Ⅲ、18-19)。〈われらはキリストのために愚かなる者となり、汝らはキリストにありてさとき者となれり。われらは弱く、汝らは強し。汝らは尊く、われらは卑し。⁽³⁾今のときにいたるまでわれらは飢え、渇き、またはだかとなり、また打たれ、定まれる住家なく、手ずから働きて勞し、ののしらるときは祝し、責めらるときは忍び、そしらるときは勧めをなせり。われらは今にいたるまで世の塵あくたのごとく、よろずの物の垢のごとくせられたり〉(同、Ⅳ、10-13)。注解によれば、心おごれるギリシア人にあてたパウロのこの書簡の一節は、パウロ自身の〈靈的自叙伝〉の一部であるという。⁽⁴⁾ロシアの瘋癲行者たちはパウロの教えを字義どおりに実践し、聖使徒の生き方を自らも現実の生き方にした求道者であった。

注(1) 《過ぎし歳月の物語》に含まれるイサーキイらの物語、独立した聖者伝として書かれた《フェオドーシイ聖人伝》は、のちにスヴァトーシャ、マルコなどの物語とともに《キーエフ・ペチェルスキ修道院聖僧伝》に収録された。

注(2) G. P. Fedotov, *The Russian Religious Mind*, N. Y. 1960, p. 110 f.

注(3) この一節はアヴァクームの自叙伝にも引用されている。総主教たちの前に呼び出されて、ニーコンのはじめた教会改革を承認するよう迫られ、不法な振舞を責められたとき、アヴァクームがこの言葉をもって応酬したのである。

注(4) パルバロ、《コリント人への手紙注解》、1963、64 ページ。

2. 瘋癲聖者たち

ロシアの瘋癲行者の歴史のなかで、キーエフ時代はいわば前史をなしている。ペチェルスキイのイサーキイは瘋癲の長い系譜において二重の意味で孤立している。13世紀初頭までのキーエフ・ルーシには、イサーキイの後継者はひとりもあらわれなかったし、その後も、キーエフを中心とするウクライナ地方には二度と瘋癲行者は生ま

れなかったからである。思うに、キリスト教は 10 世紀末以来ロシアの国教の位置を占め、首都キーエフをはじめとする諸都市に多くの教会や修道院が建てられたものの、そしてまた聖職者のなかにフェodorシイのような傑出した僧侶があらわれたものの、最初の数世紀はキリスト教精神がまだ完全に民衆のものとはなっていなかったのではあるまいか。この宗教はキーエフの支配者がギリシアから輸入し、上から民衆に与えたものであった。この事情は日本における仏教と似ている。あたかも国分寺が官の施設であったように、初期の教会や修道院は公や貴族たちの権力の象徴であり、民衆の信仰心の結晶ではなかった。その証拠には、キーエフ時代の修道院はすべて都市か、あるいはその近郊に立っていた。ベチェルスキ修道院もキーエフ社会のひとにぎりの部分を代表していたにすぎない。

13 世紀の前半にモンゴル軍がロシアに侵入し、いわゆる〈タタールのくびき〉がロシア民族を圧迫しはじめたところから、キリスト教信仰が次第に民衆の心をとらえていったようにみえる。異民族支配のもとで、キリスト教は民族を結ぶ紐帯となった。14 世紀からは森林のなかに建てられる修道院がふえていく。すぐれた僧たちは都市をすて、ふかい森のなかに庵をむすんで修行をつむようになった。徳行によって名声のあがった僧のまわりに、弟子たちが集まって僧団を形成する。やがて農民たちもその周囲に移住してきて村落をつくる。これはロシア北部への大植民運動の重要な契機となった。おそらくこの時代にロシアの民衆は真にキリスト教を理解し、その教義を血肉化したのではあるまいか。こうして成立したロシア人のキリスト教信仰が、ギリシアのものでも、またキーエフ時代のままでもなくて、独自の内容をそなえたものであったことは当然である。明確な輪郭をもった瘋癲聖者がはじめて姿をあらわすのがこの時期にあたっていることは、単なる偶然ではありえない。

ロシアの文献史料は瘋癲行者に関してきわめて寡黙である。今日に伝わっているおもなものは、教会当局によって聖者として公認された者たちの伝記である。聖者にあげられなかった瘋癲行者の事蹟は、よほどの偶然によらなければ、後世に残らなかった。瘋癲聖者の伝記にしても、第一に長短、精粗さまざまであるし、第二に内容の信憑性に問題がある。聖者の没後ただちに伝記が書かれるとはかぎらない。14 世紀の瘋癲聖者の伝記が 16 世紀に、また 16 世紀の瘋癲聖者のそれが 19 世紀に書かれたという例もある。同時代人の筆になった伝記といえども、かならずしも真実のみを語るわけではない。聖者伝には常套的なタイプが存在しており、作者は事実よりもタイプのほうに忠実であるからである。とはいえ、われわれはまず考察の手がかりとして、然るべき留保をつけた上で、瘋癲聖者の伝記にあたってみなければならない。

フェドートフによれば、ロシア正教会が聖者に祝聖した瘋癲行者は総計で 36 人で、それは 4 世紀にわたって次のように分布している（教会による聖別が行なわれた時点ではなく、聖者の没年を基準にする）：⁽¹⁾ 14 世紀 4 人、15 世紀 11 人、16 世紀 14 人、17 世紀 7 人。

次にこれらの瘋癲聖者のうち、19 世紀末に I. コヴァレフスキイのまとめた資料によって多少ともその事績の判明している者を没年順に列挙しよう（ほとんどの場合、⁽²⁾ 命日とその聖者の祝日となっている）。

ウースチュグのプロコーピイ † 1303 年 7 月 8 日

ノヴゴロドのフォードル † 1392 年 1 月 19 日

ノヴゴロドのニコライ † 1392 年 7 月 27 日

モスクワのマクシーム † 1433 年 11 月 11 日

クロプスキ修道院（ノヴゴロド近郊）のミハイル † 1454 年（一説に 1456 年）
1 月 10 日

ロストフのイシドール † 1474 年 5 月 14 日

ウースチュグのイワン † 1494 年 5 月 29 日

シェンクールスク（アルハンゲリスク地方）のゲオルギイ 15 世紀

カルーガのラヴレンチイ † 1515 年 8 月 10 日

ボロヴィチ（ノヴゴロド地方）のヤーコフ 不明

モスクワのワシーリイ 1464 年—1552 年 8 月 2 日

ブスコフのニコライ † 1576 年 2 月 28 日

ロストフのイワン † 1581 年 9 月 3 日

ユーリエヴェツ（ヴォルガ上流地方）のシモン † 1584 年 11 月

モスクワのイワン † 1589 年 7 月 3 日

スーズダリのキブリアン † 1622 年 10 月 2 日

ヴァトカのプロコーピイ 1578 年—1627 年 12 月 21 日

トーチマ（ヴォログダ地方）のマクシーム † 1650 年 1 月 16 日

トーチマのアンドレイ 1638 年—1673 年 10 月 10 日

これらの瘋癲聖者のなかで比較的詳細な伝記をもっているのは、ウースチュグのプロコーピイ、ノヴゴロドのニコライ、クロプスキイのミハイル、モスクワのワシーリイなどである。シェンクールスクのゲオルギイ、スーズダリのキブリアン、トーチマのマクシーム、おなじくトーチマのアンドレイについて知られることはごく少ない。

ボロヴィチのヤーコフにいたっては、いつどこに生きていたかすら皆目不明である。このことは各地の瘋癲聖者を比較考察する上でも、また全体として彼らの共通点をひき出す上でも、大きな障害となっていることは言うまでもない。

祝聖された瘋癲行者を世紀別にみれば、15 世紀と 16 世紀がもっとも多く、なかんずく 16 世紀がクライマックスをなしている。時間的推移は地理的分布とも無関係ではない。14 世紀の瘋癲聖者は何らかの意味でノヴゴロドと結びついていたが、15 世紀になるとロシア北部一帯にひろがり、この世紀の末には瘋癲行者の姿の見られる土地は、南はオカ川上流のカルーガから北はアルハンゲリ斯克地方におよんだ。16 世紀にはモスクワが瘋癲の行の聖地の観を呈する。そして 17 世紀にはふたたび瘋癲聖者の出身地はヴォルガ上流以北の地に限定されるのである。

ここにあげた瘋癲聖者のなかには婦人がひとりも含まれていないことも、考えてみる価値がありそうな問題である。⁽³⁾

注(1) Fedotov, *op. cit.*, p. 316. チジェフスキイは〈約 35 人〉とする。E. Benz, *Russische Heiligenlegenden*, Zurich, 1953 中の D. Tschizewskij, *Die heiligen Narren*, S. 424.

注(2) И. Ковалевский, *Юродство о Христе и Христа ради юродивые Восточной и Русской церкви*, М., 1895, стр. 161—272 による。ちなみに著者は瘋癲聖者のひとりワシーリイの名を冠したモスクワのワシーリイ・ブラジェンヌイ寺院の僧。本書は現在この分野の唯一の基本的資料を含む文献とされる。ほかに Кузнецов, *Юродство и столпничество. Религиозно-психологическое исследование*, СПб., 410 стр. と E. Benz, *Heilige Narrheit*, *Kyrios*, 1938, Heft 1-2, S. 1-5, があるといわれるが、いずれも筆者未見。

注(3) ギリシアの“saloi”のなかには女がいたし、ロシアにも、後に述べるように、19 世紀には女の瘋癲行者がいたことがわかっている。しかしこれは例外的な現象と考えるべきかもしれない。

3. 瘋癲による批判

ロシア的キリスト教精神の形成が瘋癲聖者の出現を可能ならしめたのではないかという推測は、前節の初めで述べた。ここでは彼らの出現を現実化せしめた契機として、瘋癲の行のもつ批判の意味について考えてみたい。

瘋癲行者がまずノヴゴロドやウースチュグに出現したことは、瘋癲行者の性格を考

える上で見のがせぬ重要性をもっている。ノヴゴロドはキーエフ時代以来、ロシア最大の商業都市であった。キーエフをはじめとする諸都市がモンゴル軍団の馬蹄によって蹂躪されてからは、彼らの最初の襲撃を免れたノヴゴロドがプスコフをしたがえて、他に並ぶもののない繁栄を誇っていた。この町はバルト海から黒海に通ずる水路上の要点を占め、その交易圏はスカンジナビアやハンザ都市から、東はアストラハンを通じてペルシア、南は黒海を経てコンスタンチノーブルにおよんでいた。ウースチュグ（正確に言えばヴェリーキイ・ウースチュグ、すなわち大ウースチュグ）もまたモスクワ時代に発展をはじめた商業都市で、やがて 16-17 世紀にはロシア本国とシベリアを結ぶ要衝をなすとともに、アルハンゲリ斯克を経由する外国貿易の物資集積地の役割を果たし、イギリスやオランダの商会の活動の拠点となる町である。

これらの都市では、教会の世俗化もまたほかの地方とは比較にならぬほどすすんでいた。特権階級の一翼をになう聖職者の信仰生活の退廃に対する抗議は、異端の形をとってあらわれた。14 世紀の中葉から 15 世紀の前半にかけて、ノヴゴロドとプスコフの町にロシア最初の異端である“strigol'niki”が発生した。彼らは聖職売買を非難し、教会のすべてのヒエラルキー、修道制度、聖餐・告解・洗礼などの秘蹟を否定した。“strigol'niki”異端と最初の瘋癲聖者の出現はほとんど時をおなじくしている（ロストフにおける“Markian”異端、クーリツィンのひきいたモスクワの異端の場合についてもほぼ同様のことがいえる）。異端が既存の教会制度に対する理性的なプロテストであったとすれば、瘋癲は感性的な批判であったと考えることができるのではあるまいか。瘋癲もまた教会の制度とすべての秘蹟を否定する点では異端の主張と変りがない。そればかりか、ひたすらキリストの愛に生きんがために、教会をはじめとする社会制度のみならず、すべての世俗的な価値体系を拒否する瘋癲の行は、プロテストの形として異端よりもいっそうラジカルな面をもっている。

15 世紀から 16 世紀にかけて瘋癲の行がモスクワでさかんとなったことは、モスクワ大公国を中心とする中央集権国家の成立と結びついている。〈タタールのくびき〉の時代に、モスクワはその地理的な好条件と歴代の支配者のたくみな外交手腕とによって、次第に強大となっていき、近隣の諸公国を併呑していった。1477 年にはさしものノヴゴロドが、また 1510 年にはプスコフも、モスクワ大公の支配にはいった。すでに東ローマ帝国はトルコの攻撃によって滅亡していた。モスクワはもはや全ロシアの首都というより、全キリスト教世界の中心であるという確信が生まれた。しかし中世ロシアの国家意識がもっとも高揚したこの時代は、同時に信仰の内面生活においては危機の時代であった。教会の制度と儀式が整備され、たとえばモスクワ府主教マ

カーリイによる年代記や聖者伝の集大成のごとき大規模な事業が遂行された反面では、修道院の政治権力との癒着、信仰の形骸化が進行した。修道院の土地所有を是とする〈ヨシフ派〉が対立する〈清廉派〉をおさえ、ギリシア人マクシム、ヴァシアン・バトリケーエフらの反権力的思想家は幽閉される。イワン雷帝にいたって、帝権の絶対化をめざす恐怖政治が現出した。16世紀が〈沈黙の時代〉と名づけられるのはこのためである。瘋癲の行は形式化した信仰に対する警鐘であり、瘋癲行者は〈沈黙の時代〉における民衆の抑圧されたる願望の代弁者であったのではないだろうか。

16世紀の瘋癲行者に関するもっとも信頼できる記録が、この世紀の末にモスクワをおとずれたイギリス人によって書き残されている。このイギリス人 G. フレッチャーは、16世紀の50年代からはじまった英露間の交易を円滑にすすめるために、エリザベス女王によってロシアに派遣された大使であった。フレッチャーは1588年11月下旬にモスクワに到着し、約半年間ここにとどまった。彼は帰国後まもない1591年に《ルス国論》と題する著書を発表した。これはロシアの気候風土からはじまり、政治機構・法律制度・軍事・宗教・経済について述べ、さらに民衆の風俗習慣にまで説き及んだものである。本書の宗教に関する章に、総主教以下の教会関係者についての記述につづき、次のような一節が見出される。

このほか、彼らのもとにはある種の世捨人がある（人々はこの者たちを〈神聖なる者〉と呼んでいる）。彼らはその生活と振舞いにおいては、かの“gymnosophists”〔古代インドの禁欲者苦行者——中村〕と似ている。もっともその知識と学問の点では、似ても似つかぬ存在である。彼らは一枚の布切れを腰のまわりにつけているほかは、まったくのはだかで歩きまわり、髪の毛は長く垂れて肩のまわりをおおっている。彼らの大部分は冬のさなかでさえ、首や腰のまわりに鉄の首輪や鎖をまいている。人々は彼らを予言者として、またひじょうな神聖さをそなえた者として遇し、たとえもっとも高い身分の者に関してさえも、彼らが望むままのことを自由にしゃべらせている……もしこの者たちのだれかが、通りがかりにどこかの店からその売物を取り上げていき、勝手に人に与えてしまおうとしても、店の持主は品物をそんな風にもっていかれることによって、自分が神に愛されており、神聖なる者の意になっっているのだと思いこむだけである。

この種の者がたくさんいるわけではない。なぜなら、ロシアでは、とくに冬に、はだかで歩くなどということはきわめて苦しい、寒いことであるから。現在、とりわけモスクワにひとり、このような者がいる。彼は町中をはだかで歩きまわり、

国家や政府、またとくにゴドゥノフ一族に対して痛烈な悪口をあびせている。このゴドゥノフ一族は、今この国のひじょうな抑圧者と考えられているのである。もうひとりいたが、それはしばらくまえになくなってしまった（名前はバジレオといった）。この人物は、先帝〔イワン雷帝〕が人民に対して残虐と圧政を加えたことをたえず非難していた。人々は彼の遺骸を最近モスクワの宮廷の近くにあるりっぱな寺院に移し、聖者の列に加えた。彼はそこで多くの奇蹟を行なった（修道僧たちは人々にそう信じこませようとしている）。民衆ばかりか、大貴族や皇帝・皇后までが多くの供物をここにささげ、自らうやうやしくこの教会をおとずれている……

ほかのだれもがあえて言おうとしないような高貴な身分の者の誤りを指摘する点で、彼らは“Pasquils”〔諷刺家〕であり、人々は彼らを尊敬している。このように予言者をまねて自由に振舞うので、こっそり殺されてしまうこともある。先帝の時代、ひじょうに大胆にその政府の悪口を吐いたために、彼らのひとり二人が殺されたのがその例である。⁽¹⁾

フレッチャーの記事の前半は瘋癲行者一般の生活様式、ならびに民衆の彼らに対する態度である。フレッチャーはおそらくこれを自分で見たり（彼は滞露中に瘋癲の行のもうひとつの中心地であるヴォログダをもおとずれている）、ほかの者から聞いた⁽²⁾りしたものであろう。現在もモスクワにひとりいるというのは、〈大頭布〉と綽名されたイワンのことで、ひょっとしたら、フレッチャーもその目で見える機会があったかもしれない。時のツァーリは雷帝イワン四世の子のフォードルで、外戚のポリース・ゴドゥノフが実権をにぎっていた。先帝を非難しつづけ、しばらくまえになつた瘋癲行者というのはワシーリイである。ワシーリイはフレッチャーがモスクワに着いた 1588 年に教会から列聖され、その遺体はクレムリンの前の赤の広場の一角に立つ大寺院に改葬された。この寺院は雷帝のカザン汗国征服を記念して 1555 年—1560 年に建てられたもので、本来ボクロフスキイという名であったが、今ではワシーリイ・ブラジェンヌイ寺院として知られている（ブラジェンヌイは〈至福なる〉の意）。

フレッチャーがここで瘋癲行者の国家や権力者に対する告発者の面を強調していることは、奇蹟についての懐疑的な見方（これについては後に述べる）とあわせて、注目に値する。上記の引用には省いたが、フレッチャーはプスコフの瘋癲聖者ニコライのイワン雷帝への諷諫についても述べている。これはフレッチャーのロシア行きより 18 年前の事件で、瘋癲行者が政治的役割を果たしたもっとも顕著な例である。これ

についてはニコライの聖者伝にもくわしく述べられているが、そこでは事実と異なる潤色がかかなりほどこされている。それに比べるとフレッチャーの記述はより簡単でありながら、かえって民衆のあいだで保存されていた生ま生ましい形をよく伝えている。それによると、1570 年イワン雷帝はプスコフ市民に謀叛と暴動の企てのあることを疑って、この町を懲罰するために大軍をひきいて押し寄せた。ツァーリはまずニコライをその庵にたずねて挨拶をし、そのあとで彼に贈物を与えた。するとこの〈神聖なる者〉は、贈物に対する返礼として一片の生肉をイワンに送りとどけた。時期はちょうど復活祭前の大斎期にあたっていた（年代記によれば 2 月下旬⁽³⁾）。ツァーリは、この精進期間中信徒は教会の掟で肉食を禁じられているのに、肉をさし出すとは何ごとであるか、とニコライに伝えさせた。するとニコライはこう答えた。〈イワヌシカは大斎期に肉を口にするのは掟にそむくことであると知りつつも、人間の肉を食べることは掟に反すると思わず、すでに食べてしまったではないか。〉皇帝はこの言葉を聞いて、神罰がわが身にふりかかることを恐れ、プスコフの市民を殺戮することなく⁽⁴⁾町を去った。かくして瘋癲行者ニコライは多くの無辜の人命を救ったのであった。

注(1) G. Fletcher, *Of the Russe Commonwealth*, Facsimile Edition, 1966, Cambridge-Massachusetts, p. 89-92.

注(2) イギリスのモスコヴィア商会の社員として Horsey, Marsh などもロシアに駐在しており、フレッチャーは彼らから情報を与えられたという。プスコフのニコライの話はホーシーが語ったものであるらしい。R. Pipes, *Of the Russe Commonwealth by G. Fletcher* (op. cit.) [p. 23]; Ковалевский, *op. cit.*, стр. 141.

注(3) Ковалевский, *op. cit.*, стр. 202.

注(4) 瘋癲行者ニコライはプーシキンの劇詩《ボリス・ゴドゥノフ》にも登場する。プスコフのニコライは 1576 年に没しているのも、もちろんフォードルのあとを襲ってツァーリとなったボリスの同時代人ではない。フレッチャーの記録にもあらわれるイワンが、ボリスを非難した瘋癲行者として知られる。そのイワンもボリスの登極前に世を去っている。プーシキンの劇詩のニコライはイワンを下敷にした作家の創作と考えなければならない。

4. 奇蹟と予言

聖者としてみとめられた瘋癲行者たちは何らかの意味で奇蹟を成就した者である。瘋癲行者はすでにその度はずれな精進によって、世人の感嘆と尊敬をあつめてはいる。だが、その感嘆と尊敬はたえず憐憫と侮蔑の念ととなり合っている。後者がまさって

いるときには崇拜の情はきざしにくい。瘋顛行者が常人には及びもつかぬ精進の結果として超自然的な能力を獲得し、それを発揮したときに、感嘆は畏怖に、尊敬は崇拜に変わる。この超自然的な能力の具現化したものが奇蹟である。

瘋顛聖者の示した奇蹟をいくつかあげてみよう。奇蹟の大部分は聖者の死後、その柩の前でおこることになっているが、瘋顛行者がその生前に奇蹟をあらわした例もいくつか存在する。14 世紀の末、ノヴゴロドにある富裕な貴族が住んでいて、瘋顛行者のニコライを愛していた。ある日、彼は道でニコライにあって、その夜の酒宴に彼を招いた。夜になってニコライがその貴族の家におもむくと、召使たちは彼を入れることを拒んだ。いよいよ酒宴がはじまることになり、召使のひとりが酒蔵に酒を取りに行った。すると酒樽はひとつ残らず空になっていた。この不思議に驚いた主人は、召使たちにもしや瘋顛行者のニコライがたずねてこなかったかとたずねた。はたしてニコライが手荒く追い返されたことがわかった。貴族の命令でニコライが丁重に招き入れられると、今度は酒樽はいっぱいになっており、以前よりいっそう芳わしい香りを放っていた。

ロストフのイシドールについてはこういう話が伝わっている。この町の商人が航海の最中に嵐に襲われ、船が難破してしまった。乗客たちは相談して、仲間のひとりを犠牲にささげ、海神の怒りをしずめることにした。くじを引くとロストフの商人があたった。そして彼が一枚の板とともに海のなかへ投げこまれた。すぐに船は動き出した。商人は波間にうかんでもはやこれまでと観念していると、目の前に瘋顛行者のイシドールがあらわれ、商人を板に乗せて船まで押していつてくれた。イシドールはこのとき、陸上におけるとおなじように水の上を歩いていたという。このように瘋顛行者が自由に水の上を歩くという話は、ノヴゴロドのニコライとフョードル、ユーリエヴェツのシモン、モスクワのワシーリイについても伝わっている。また、モスクワのワシーリイについては、カスピ海で嵐のために沈みそうになった船を助け、そこに乗っていたモスクワの商人とペルシアの商人たちの命を救ったという伝説もある。ペルシアの王は臣下からこの話を聞いて、モスクワのツァーリ・イワンに手紙でそのことを知らせてよこしたという。

ウースチュグのイワンは、すでにその生存中から病気を治す力をもっていた。ウースチュグの代官フョードルは、その妻マリアが重い熱病にかかったので、召使をイワンのもとへやって、妻のために神に祈ってくれるように頼むことにした。召使がイワンの小屋に着いてまだ何も言い出さないうちに、イワンは大声で〈フョードル公ご夫妻、ようこそお達者で〉と叫んだ。驚いた召使が戻ってみると、マリアはもうすっか

り元気になっていた。

モスクワのイワンはその死の直前に、モスクワ川の橋の上でびっこをひいている男に出会った。わけをたずねると、二年前に右足に怪我をしたと答えた。そこでイワンがその手を相手の右足にふれると、たちまちその足は元どおりに動くようになった。

遺骸から芳香が出て、町の人々がはじめてその匂いで聖者の死を知った話はロストフのイシドールについて知られる。また、ウースチュグのプロコーピイは7月8日に世を去ったが、その日には雪が降ったという。

ボロヴィチのヤーコフの場合には、遺骸の出現それ自体が奇蹟であった。1540年の春に、この地方を流れるムスタ川の岸に、巨大な氷塊が流れついた。ムスタ川は急流で知られていたにもかかわらず、この氷塊はいつまでも下流にながれ去らず、周囲にもうもうと水蒸気を立ちこめさせていた。三日目の夜になって、この村のおも立った人々はいっせいにおなじ夢をみて、氷の上に瘋癲行者ヤーコフの柩が乗っていることを知った。翌朝、村人たちはヤーコフなる人物がどこのだれとも知らぬまま、柩を丁重に葬ったのであった。

瘋癲聖者がその死後にさまざまな病気を治癒せしめる奇蹟は、ほとんど無数といっていほど記録されている。ここでは代表的な例として、モスクワのワシーリイの遺骸があらわした奇蹟のごく一部を示そう。

モスクワのある長司祭の未亡人クセーニアは、十年間片目が見えないで苦しんでいたが、とうとうもう一方の目も病気になってしまった。彼女はワシーリイの遺骸が多くの奇蹟を示したことを耳にしたので、しばしば彼の教会へ出かけて祈っていた。するとある夜、夢にワシーリイがあらわれて、〈立ってわが柩のもとへ行け〉と告げた。命ぜられたとおりにすると、たちまちクセーニアの両方の目は治ってしまった。また、いつのころか、モスクワにヨシフという乞食がいた。生来の啞である上、いつか悪霊にとりつかれて、発作をおこすようになった。発作がおきるとだれかれの見さかしくなく、乱暴をはたらくのであった。これを自分でも悲しんだヨシフは、ようやくの思いでワシーリイの柩までたどり着き、祈禱をあげて聖水を体にふりかけてもらおうと、とたんに彼の舌はほぐれ、悪霊も離れてしまった。

祝聖された瘋癲行者たちがその死後も長く、病める者や貧しき者に希望を与えつけてきたことがわかる。

瘋癲聖者たちの功德に帰せられる奇蹟は、瘋癲聖者自身の功力ではなく、じつは彼ら愛する民衆の側の信仰の力であった。信仰の結果として生ずる奇蹟に合理的な説明を与えようとするのは無意味である。ただ参考までに、奇蹟がときに計画的に捏造

されうることを示す実例をかかげておこう。(断っておくが、これは奇蹟一般の意義をおとしめるために述べるのではない。)すでに一部を引用したフレッチャーの記録によれば、彼のモスクワ滞在中に、ある足なえの男が瘋癲行者ワシーリイの遺骸の力によって、元どおりの肢体になるという奇蹟がおこった。すると、かつてその男とねんごろにしていたひとりの女があらわれて、その男は六年前から外を歩くときはびっこをひいていたが、夜になって家に帰ると跳ねまわることさえできた、といって秘密を暴露した。男は、じつは修道僧にやとわれて、長いあいだ人前でびっこのふりをしていたのであった。フレッチャーはさらに、〈奇蹟成就者〉ワシーリイにとってはもうひとつ不名誉なことだがと言って、彼の帰国直前、落雷のためにワシーリイ・ブラジェンヌイ寺院で八人の人間が命を失った事件を書き加え、それ以来、寺院の鐘の音も響きがわるくなったようだ、と述べている。

瘋癲行者はまた予言の力をもつと考えられていた。たとえばウースチュグのプロコーバイについては、その聖者伝のなかに次のような物語が収められている。神は人々の罪のいや増すがゆえに、ウースチュグの町に電光と石の雨を送られることになった。プロコーバイはこのことをあらかじめ知って、町の人々に罪を悔い改めるように説きすすめた。しかし人々は瘋癲行者の言葉に耳をかそうとはしなかった。プロコーバイは悲しんで泣き叫びながら町を走りまわった。やがて一天にわかにかき曇り、恐ろしい雷鳴がはじまった。市民は聖母教会に集まり、プロコーバイとともに必死になって祈りはじめた。祈りは聞きとどけられ、石の雨は町には降らず、町のはずれに降ったという。この石の雨が今にいたるまで残っているというのは、おそらく隕石の落下にまつわる伝説がいつのまにかプロコーバイの名と結びついたものであろう。プロコーバイのなくなったのは14世紀の初頭であり、聖者伝は16世紀末に成立したといわれるから、この種の伝説が発生する余裕は充分にあったわけである。プロコーバイの予言能力については、彼がいつも左手に三本の火搔棒をもっていて、それが天をむいている年は豊作、ななめ上をむいている年は凶作になったという話や、有名なベルミの聖者ステファンの母親がまだ3歳のときに、プロコーバイがその幼女にステファンの出生を告げたという物語が残っている。

ノヴゴロドの瘋癲行者フョードルは、あるとき凶年の到来を予知して、〈パンを大切にしろ〉と町中を呼び歩いた。はたしてその年は収穫がわるくて、飢饉が襲ってきた。またこのフョードルがある日人ごみのなかで〈ここはきれいさっぱりになる、かぶらを播くがいいぞ〉と叫ぶと、まもなくその辺に火事がおこって、あたり一面焼野原になった。

ロストフの瘋癲行者イシドールがこの町の公に将来大主教となる運命を予告したこと、カルーガのラヴレンチイがクリミア・タタールを迎えうつために出陣するパトロンのシメオン公にむかって敵に対する勝利を予告したこと、モスクワのイワンがボリース・ゴドゥノフの戴冠前に来たるべき〈動乱〉時代を警告したこと、なども有名である。ユーリエヴェツのシモンのもとへは、多くの母親たちが子供を連れておとずれ、その子が長生きできるかどうか予言してもらったという。

将来を見ぬく力でもっともよく知られたのは、ノヴゴロドのクロプスキ修道院のミハイルである。ある日彼は不意に修道院の鐘楼に登り、大小すべての鐘を打ち鳴らした。何事ならんと集まってきた人々にむかって、ミハイルはその日モスクワ大公のもとにイワンという息子が生まれ、ノヴゴロドはやがてイワンのものになるであろうと告げた。この言葉はミハイルの死後になって実現し、ノヴゴロドはこのとき生まれたイワン三世によってモスクワ大公国に併合されてしまった。ミハイルの予言は権勢家に対してもむけられた。ある日、強慾をもって知られたノヴゴロドの大主教が彼の修道院にやってきて、一頭の馬を召し上げた。ミハイルは大主教に面とむかって〈教会の掟では牧者が羊の群を掠奪することが許されているのか。まもなく世を去っていく身であるのに、貴僧はいったいだれのために財産をたくわえるのか〉と詰問した。大主教はこの言葉にショックをうけたのか、まもなく奇病にとりつかれて、あっけなく死んでしまった。

聖者伝に記録されていたり、口承で伝わったりする瘋癲行者たちの予言の話は、このほかにも限りなく存在する。奇蹟についてすでに述べたように、これらの予言が真実であったか否か検証することは無益なわざである。しかし、自らの生活の安楽を求めず、個人的な利害関係からまったく解放されていた瘋癲行者が、時として正常人の目には映らぬ真理をするどく感得することができたであろうことは容易に想像できる。

5. 瘋癲発心の動機

瘋癲行者は正常な理性を失った者であるのか、それとも失ったふりをよそおう者であるのか。

ソビエトの大百科辞典が“jurodivyj”という語に〈……狂人（あるいは狂人とみせかける）禁欲者……狂気の（あるいは狂気をよそおう）者〉という定義を下していることはすでに述べた。これはおそらく、理性を失った者と、それをよそおう者との区別を問わず、瘋癲の所行を示す者をすべて瘋癲行者とみなすということではなくて、

世にいう瘋癲行者が真実理性を失っているのか否かの区別が容易に立ちがたい、ことによれば通常瘋癲行者とみとめられている者のなかには、みせかけの狂人にすぎない者がいるのではないかという懐疑の表現であろう。瘋癲の行の歴史的変遷、とりわけ衰退期のそれを考えれば、この懐疑論は正当な根拠をもっているといわざるをえないが、それから一步すすんで、それではいったい正気と狂気の境界はどこにあるのかと考えれば、簡単に本物と偽物の違いを指摘することはむずかしい。たとえ〈科学的に〉何らかの基準をもうけて狂気と正気の区別がついたとしても、狂気の者が時に正気に戻り、正気の者が時に狂気にかえることがあるかもしれない。また宗教現象をすべて病理的なものと考えたり、逆に信仰を社会適合の一形態としてとらえる立場に立てば、正気の者がまさにその正気のゆえに、狂気とみとめられることもありうるであろう。

科学の立場からみれば、瘋癲行者は精神異常者以外の何ものでもない。⁽¹⁾これとは正反対に、教会は少なくとも列聖された瘋癲行者については、信仰のために狂気の仮面をかぶった者という見方をとっている。この解釈は〈佯狂者〉という日本ハリストス教会の定めた訳語にもあらわれている。瘋癲行者がじっさいに理性喪失者か、それとも〈佯狂者〉にすぎないのかを見わけるとの困難に関して、フェードトフが次のように述べていることは印象的である。〈俗人、とくにロシアの民衆にとって、困難は存在しない。本物であろうと、佯狂であろうと、宗教的カリスマ（予言、明察など）をそなえた狂人はつねに聖者であり、しかもおそらくはロシアではもっとも愛される聖者である。⁽²⁾

瘋癲行者たちは生まれながらにして〈異常〉であるわけではない。それでは彼らはいかなる動機あるいは原因で瘋癲の所行を演ずることになるのか（とうぜんながら、動機も原因も不明のことが多いが）、聖者伝などによって考えてみよう。むろんこの場合にも、聖者伝がおおむね瘋癲すなわち佯狂であるとする教会の立場から、さらにその上類型的タイプにしたがって執筆されていることにあらかじめ留意しておかねばならない。

ギリシアの“saloi”がほとんど修道僧であったのに対し、ロシアの瘋癲聖者が、ひとりの例外をのぞいて、すべて俗人であったことは特徴的である。一般に“saloi”がひとつは自らの増上慢をおさえる手段として、もうひとつは聖霊のはたらきを庶民に及ぼそうという明確な目的意識をもって、瘋癲をよそおうことも、ロシアの瘋癲行者たちとやや趣きを異にする点ではないかと思われる。⁽³⁾

ロシアの瘋癲聖者でただひとりの修道院出身者はクロブスキイのミハイルである。しかしこのミハイルにしても、修道院のなかでの修行の結果として瘋癲の振舞をみせ

はじめたのかどうかはわからない。1408 年 6 月 23 日の朝——と聖者伝はいう——クロブスキ修道院の修道司祭マカーリイが香をたくために自分の庵室にはいってみると、しめきっておいたはずのその部屋に、僧衣をまとった見知らぬ男が坐り、ろうそくの火のもとで使徒行伝を筆写していた。マカーリイは不思議に思って僧院長を呼んできた。僧院長がこの男にむかって、〈おまえはだれじゃ。どうしてここに来たのか〉とたずねたところ、相手はその質問をおうむ返しに繰り返すばかりで、人々はこの男が瘋癲行者であることをさとした。その後しばらくたってから、ある公がクロブスキ修道院に立ち寄り、彼の姿を見て、〈あなたはミハイル・マクシモヴィチではないか。どうしてこんなところにかくれていたのか〉と叫んだので、ようやく彼の名がわかったという。

聖者には列せられなかったが、キーエフのイサーキイも修道僧であった。信憑性の点では一般の聖者伝より格段にまさっている《過ぎし歳月の物語》によって上述したように、イサーキイは七年間のきびしい禁欲生活、ついで悪魔の誘惑、その上さらに二年の失神横臥のあとで、瘋癲の所行を演じはじめたのであった。

ウースチュグのプロコービイはドイツ人であった。ノヴゴロドで手広く商売をいとなむうち、カトリックよりギリシア正教のほうがすぐれていることをさとして改宗した。そして正教の修道僧たちの生活に接してその感化を受け、全財産を乞食と教会に喜捨して、自分は瘋癲行者となった。ところがノヴゴロドでは人々がプロコービイの善行をおぼえていて、彼は神の前では偉大であるとほめそやすのでいたたまれず、各地を放浪したすえに、ウースチュグに住みついた。この記事がどれほど信頼できるか疑問であるが、一般の〈正常な〉人々が瘋癲行者を自分たちとは出身からして異なる者という意識をもっていたらしいことがわかる。プロコービイのほかにも、ロストフのイシドールがドイツのブランデンブルグ生まれであると信じられていた（ただし彼はスラヴ人で、生まれたときから正教徒であり、ドイツにいたころからすでに瘋癲の振舞があったという）。

概して瘋癲行者には放浪性がみとめられ、生まれ故郷を出て各地を遍歴したのちに、どこかの町に落ち着く例が多い。たとえばモスクワのイワンも、ヴォログダに生まれ、ロストフにおもむいて瘋癲行者となり、やがてモスクワに移っている。

瘋癲聖者の伝記でその両親の名や幼年時代のことが多少とも書かれている場合には、聖者伝一般の紋切型の反復にすぎないことがほとんどである。まず両親は敬虔なキリスト教徒であり、聖者自身は子供のころからひたすら神を恐れ精進にはげみ、斎戒日以外の日でもパンと水以外は口にせず、長ずるに及んでも〈人間の栄光〉を望まずし

てついに瘋癲行者となる、といった工合である。このようなステレオタイプからはずれているものがまったくないわけではない。たとえばウースチュグのイワンは幼くして父を失い、母は彼を連れて修道院にはいった。まもなくイワンは尼僧となった母のもとから離れて、瘋癲行者となった。

ロストフのイワンは中年になってこの町にあらわれた者で、前半生のことは判明していない。ただ町の人々は、イワン雷帝の迫害をのがれてきたのではないかと想像していたという。

ヴァトカのプロコービイは12歳のときに落雷にあって気を失ったことがあり、それ以来癲癇の発作をおこすようになった。この病気は修道院で祈禱してもらってまもなく治ったが、プロコービイはその後しばらく教会ではたらき、20歳のころ両親に結婚をすすめられたので、町へ出て瘋癲行者となったという。

トーチマのアンドレイは両親の死後ガーリチの修道僧のもとに寄寓していたとき、ステファンなる人物のすすめによって瘋癲行者となったといわれる。

両親の言いつけを拒むため、あるいは他人にすすめられてから、瘋癲行者になるというのは、少なくとも14世紀のプロコービイの発心と比べれば、受動的である。17世紀の瘋癲聖者であるプロコービイやアンドレイがこのような消極的な理由から瘋癲の行を選んだということは、15-16世紀に最高潮に達したこの現象がこの世紀からいちじるしく下り坂にむかうことと無縁ではあるまい。

注(1) 大部分の西ヨーロッパの研究者たちは東方教会の“saloi”のなかに純粋な精神病のケースをみている。cf. Fedotov, *op. cit.*, p. 323-4.

注(2) Fedotov, *op. cit.*, p. 324.

注(3) “saloi”のなかでも、4世紀にエジプトのある尼僧院にいたインドーラの場合は、その自発性の点でロシアの瘋癲行者に近いようである。

6. 瘋癲の行の衰退

18世紀以後教会が瘋癲行者の祝聖をやめたので、瘋癲の行は衰えるようになったといわれる。⁽¹⁾ たしかに17世紀初頭の^{スモータ}〈動乱〉以来ロシアでは、宗教にかぎらず文化のあらゆる領域で、より開明的・西欧的なポーランドやウクライナの影響がつよまり、西欧的近代化の傾向はピョートル大帝にいたって決定的となる。瘋癲行者はモスクワ的蒙昧の象徴と考えられ、政府と教会当局はさまざまな規則や命令を発して、瘋癲の

行を禁圧しようと努めた。たとえば 17 世紀の 30 年代にはヨアサフ総主教が瘋癲行者を教会のなかに入れることを禁止した。このころから瘋癲行者は修道院に收容されるようになった。1722 年には、総主教に代わって全国の教会を管理することになった宗務^{ツノド}庁から、すべての瘋癲行者を修道院にとじこめ、一生涯そこで労働に従事せしめよという命令が出された。瘋癲行者はもはや警察の目を恐れて、めったに街頭に姿をあらわさなくなった。

しかし瘋癲の行の衰退はこのような外部からの圧迫の結果として生じたのではなく、むしろすでに 16 世紀以後瘋癲行者自身の内面的退廃によってもたらされたのではないかと考えられるふしがある。16 世紀に 14 人をかぞえた瘋癲聖者が 17 世紀には 7 人にへり、18 世紀にはゼロとなったのは、教会の政策にもとづくと同時に、瘋癲の行の質的低下に起因しているのではないかと思われるのである。

瘋癲行者の数そのものは時代が下るにつれて減少するどころか、かえって増えていったようである。増えたなかには、瘋癲行者全体の意義をひくめるような半瘋癲あるいは偽瘋癲の行者が大勢まじっていたらしい。

すでにわれわれは 16 世紀なかば、イワン雷帝の一書簡中に次のような一節を見出す。〈偽予言者の男や女や娘や老婆たちが、髪をふりみだし、はだかはだしで村から村へと走りまわり、体を震わせながら、自分たちは聖者アナスターシアやビャートニツアの命令を受けているのだとわめいている。⁽²⁾〉この〈偽予言者〉とは何ものであろうか。イワンの苦情は、すでに引用したフレッチャーの記事にある〈この種の者がたくさんいるわけではない……現在、モスクワにひとり、このような者がいる……もうひとりいたが、それはしばらくまえになくなってしまった〉という証言と明白に食い合っている。コヴァレフスキイはイワンのいう〈偽予言者〉を偽の瘋癲行者と考えている。⁽³⁾フレッチャーの著書に〈偽予言者〉＝偽瘋癲行者への言及がまったくみえないのは、おそらく当時はまだ瘋癲の本物と偽物のあいだを明瞭に区別する何らかの目安があったのにちがいない。とはいえ、現実に〈偽予言者〉が存在しているかぎり、瘋癲行者のなかに本来異質のものである〈偽予言者〉たちが混入する危険がたえず存在したわけである。

瘋癲の行に対するもうひとつの脅威は、正気の人間の側からのものであった。16 世紀以後は、おそらく瘋癲の行が社会意識のなかで徳行のひとつのあり方（ひょっとしたらひとつの職業）として確立していて、正常な理性をそなえた人間が、その理性のはたらきの結果として瘋癲の行をわが身に課する場合があったからである。これに関連して、16 世紀の瘋癲聖者たちの発心の動機が以前に比べて質的にかなり変化し

ていることを、前節の終りで指摘した。ここではもっと別な例をあげてみよう。

聖別は受けなかったが、17 世紀の分離派教徒の指導者であるアヴァクームの自伝に登場するフョードルも、瘋癲行者となった経緯がめずらしくはっきりしている。アヴァクームによると、フョードルはノヴゴロドの富裕な役人の子であった。結婚してから何かの事情で瘋癲行者になることを神に誓った。まだこの誓いを実行に移すことをためらっているうち、あるとき船に乗っていて嵐に襲われた。フョードルは船から落ちて今にもおぼれそうになった。そのときフョードルはかつての誓いを思い出し、もし助かったらすぐに瘋癲行者になろうと考えたとたんに、彼は不思議な力で甲板に引き上げられた。岸に上がるとフョードルはただちに家族をすてて放浪の旅に出たのであった。

アヴァクームの自伝にはもうひとりアヴラアーミイという瘋癲行者があらわれる。その発心の動機は不明であるが、彼は瘋癲の所行を演ずるかたわら、流刑になったアヴァクームとモスクワの分離派教徒とのあいだの連絡係をつとめ、教会改革に反対する論争的な内容の著述を編んだことさえあった。その後彼はアヴァクームと文通していることが発覚して逮捕されたが、いかなる訊問に対しても瘋癲行者であることを楯にとり、何ひとつ白状しなかったばかりか、獄中であって当局者との論争の記録を正確に書きとどめたという。⁽⁴⁾

フョードルにしても、アヴラアーミイにしても、瘋癲の行のきびしさの点では瘋癲聖者たちとまったく変りがない。アヴァクームは語っている。

フョードルはきびしい精進を重ねていた。昼は瘋癲の行をつとめ、夜は涙にむせびながら一晩中祈っていた……せいぜい一、二時間横になるだけで、すぐに起き上がり、千回の礼拝を行ない、それから床に坐るか、あるいは立ったまま、三時間ばかり泣くのであった。ウースチュグでは五年間シャツ一枚で歩きまわり、たえずはだしで寒さにこごえていた。わたしはそれをこの目で見たのである。⁽⁵⁾

またアヴラアーミイは、〈修道僧になる前から、シャツ一枚で冬も夏もはだしで放浪していた……泣くのが大好きで、歩きながら泣いていた〉。⁽⁶⁾

奇蹟について言えば、アヴァクーム自らフョードルの行なった不思議な事績をいくつか伝えているし、アヴラアーミイの場合はステンカ・ラージンの反乱を予言したことが知られている。アヴァクームが焚刑に処せられる以前に、フョードルは首をくくられ、アヴラアーミイはやはり焚刑を受けた。

これら二人の瘋癲行者のこのような功業にもかかわらず、われわれは 16 世紀まで

の瘋癲聖者と彼らのあいだに、何かしら異質のものをを感じる。それはフョードルがきわめて意識的に、あるいは義務感から、瘋癲を献身の行として選択し、アヴラアミイは瘋癲行者という評判を戦術的に利用さえしたという事実のためである。類推すれば、きわめて卑俗な個人的利益のために、瘋癲のマスクをかぶる者がほかにもあらわれなかったとはいえない。いやむしろ、このころにはその種の偽瘋癲行者が、瘋癲聖者によって代表される瘋癲の行の本来的なあり方を根本的に変えつつあったとみるべきであるかもしれない。

17 世紀中葉のモスクワには、なおかなりの数の瘋癲行者がいたことがわかっている。篤信をもって知られたツァーリ・アレクセイは、いつも宮廷に何人かの瘋癲行者を養っていたという。アヴァクームは瘋癲行者のあいだでとくに人気が高く、上記二人の瘋癲行者のほかに、もうひとりのキプリアンという瘋癲行者が彼の弟子のなかにいたことが知られる。⁽⁷⁾キプリアンはアヴァクームの論敵であり迫害者であった総主教ニーコンからも愛されていた。当時モスクワをおとずれたシリアのある高僧は、ニーコンがこのキプリアンを食卓で自分のわきに坐らせ、手ずから銀の皿のスープを彼に飲ませ、残ったスープを自分が飲んだと伝えている。⁽⁸⁾

すでに述べた理由によって、18 世紀以後は瘋癲聖者がひとりもあらわれず、少なくとも当局の命令が忠実に実行されるかぎり、彼らの姿を街頭で見かけることはできないことになった。とはいっても、18 世紀にはむろんのこと、19 世紀になっても、都市や農村を多くの瘋癲行者が徘徊していた。たとえば作家のトルストイは処女作の《幼年時代》のなかで、自分が生まれたトゥーラの地主屋敷に出入りしていたグリーシャという瘋癲行者を次のように描いている。

彼はどこから来たのか、両親はだれなのか、どんな動機で放浪生活を送るようになったのか、彼の生活はどんなものか、そんなことはだれひとり知らなかった。彼は 15 の年から瘋癲行者として知られ、夏も冬もはだしで歩きまわり、あちこちの修道院をたずね、自分の気に入った者に聖像を与えたり、謎めいた言葉をしゃべったりしていた。人によってはその言葉が予言と受けとられるのであった…… 彼が金持ちの両親のあいだに生まれた不仕合せな子で、清い心の持主だと言う者もあれば、ただの百姓でなまけ者だと言う者もいた——これがわたしの知っているすべてであった。⁽⁹⁾

このあとさらにグリーシャの熱心な祈禱の様子を述べた 23 歳のトルストイは、最後にこの瘋癲行者をこう賛美している。

おお、偉大なるキリスト教徒グリーンシャよ。御身の信仰はかくも強固であったがゆえに、御身は神を身近かに感じ、御身の愛はかくも偉大であったがゆえに、言葉はおのずから御身の口から流れ出たのである——御身はそれを理知の力で確かめることなどしなかった。言うべき言葉を見出せず涙にむせびながら大地に身を投げたとき、御身は偉大なる神に何と崇高なる賛美をささげたことであろう！⁽¹⁰⁾

コヴァレフスキによれば、19 世紀の中葉ニージェゴロド県アルザマス 郡のセラフィーム・ジヴェエフ修道院にペラギア・イワーノヴナという女の瘋癲行者がいた。ペラギアは有名なサロフ修道院のセラフィーム（1757—1833 年）をたずねたときに発心し、夫をすて瘋癲の所行を示しはじめたのであった。予言をしたり、他人の病気を治す力をもっていて、晩年にはあまり泣きすぎたために目がくさってしまい、1884 年に高齢で世を去ったという。⁽¹¹⁾ 高名なスラヴィストのチジェフスキはペラギアのほかに、ヴォローネジ県ザドンスクのアントーニイ・アレクセーヴィチ（1851 年没）、ヤロスラーヴリ県ウーグリチのピョートル・トマニツキ（1866 年没）の名をあげている。⁽¹²⁾

イギリスの宗教家 W. パークベクも 19 世紀の末にプスコフのベチェルスキ修道院で出会った瘋癲行者の姿を、故郷にあてた手紙のなかで感激をこめて描いている。

わたしが生まれてはじめて出くわした瘋癲行者は、突然修道院長の部屋にあらわれ、厚いガウンのようなものを身にまとい、葉のついた大きな枝を手にもって、それを振りまわしていました。まったくの百姓でしたが、きわめて美しい容貌をしており、体格もよく、長い黄色いひげを生やし、すばらしい目をしていました。その目は話をするときにはきらきら輝きました。もし彼が意味のわからぬことをしゃべらず、異常な振舞をしなければ、彼をおかしいと思う者はないでありましょう…… やがて彼は突然立ち上がって部屋を出て、修道院の門をくぐって、どこか闇のなかへ姿を消しました。⁽¹³⁾

しかし、トルストイなどの賛美にもかかわらず、グリーンシャその他の 19 世紀の瘋癲行者には、大主教を面罵したクロブスキのミハイル、雷帝をおびえさせたプスコフのニコライ、ボリス・ゴドゥノフを非難してやまなかったモスクワのイワンなどのような、かつての瘋癲聖者の面影はない。あたかも瘋癲行者は近代社会に馴致されてしまったかに見える。ノーベル文学賞を受けたロシア作家のブーニンは亡命前にロシア各地で 30 人ほどの瘋癲行者を目にしたが、すべて偽行者であったと断言して

近代になって、ロシアの民衆のキリスト教信仰がうすらいだわけではあるまい。だが、教会の建物がますます壮大に、ますます華美になっていく反面、その信仰は惰性と化していく危険はなかったであろうか。信仰をささえる精神が批判力と創造性を失った結果が、瘋癲の行の衰退としてあらわれたように考えられるのである。

愛と痴愚、神聖と狂気がロシアにおけるほど密接に結びついていたところはない。瘋癲行者のなかにもっともロシア的な愛の英雄の姿が具現されていた。

本来的な意味での瘋癲行者とは、要するに、キリストを愛するあまり、世俗の常識からみて痴愚あるいは狂気にいたった者である。“urod”（不具者）に由来する“jurodivyj”は、いわば精神の不具者である。〈健全な〉精神と〈正常な〉理性をもつ普通人には到達できない真理を、かえって不具者が体得実践すること、あるいは愛の純潔を守るためには狂気の面をかぶらざるをえないことは、人間社会における痛烈なアイロニーではあるまいか。

注(1) Fedotov, *op. cit.*, p. 318.

注(2) Ковалевский, *op. cit.*, стр. 150.

注(3) *ibid.* 《アヴァクーム自伝》には瘋癲行者とはっきり区別して、悪霊につかれた者たちについての記事がある。〈偽予言者〉もあるいはその類であろうか。

注(4) А. Н. Робинсон, *Жизнеописание Аввакума и Епифания. Исследования и тексты*, М., 1963, стр. 275-6.

注(5) *ibid.*, стр. 167. (参照, 松井茂雄訳〈司祭長アヴァクーム自伝〉, 《スラヴ研究》第10号, 1966)。

注(6) *ibid.*

注(7) *ibid.*, стр. 266.

注(8) Ковалевский, *op. cit.*, стр. 143.

注(9) Л. Н. Толстой, *Собрание сочинений*, 1958, т. 1, стр. 24.

注(10) *ibid.*, стр. 42.

注(11) Ковалевский, *op. cit.*, стр. 144 f.

注(12) Tschizewskij, E. Benz, *op. cit.*, S. 434.

注(13) *Life and Letters of W. J. Birkbeck, L.*, 1922, p. 48-49.

注(14) Fedotov, *op. cit.*, p. 316.